

日本語教育における助数詞の扱いの問題点

助数詞「本」を例に

Issues Surrounding Numeral Classifiers in Japanese Language Education
: in the case of “Hon”

北川 幸子

KITAGAWA Sachiko

早稲田大学大学院（東京都新宿区西早稲田1 - 7 - 14）
Graduate School, Waseda University

Abstract: Numeral classifiers are taught at the primary level in Japanese language education. However objects that are countable by numeral classifiers are not limited to the basic words taught at the primary level. Through researching drama scripts, I examined the adequacy of the way the numeral classifier “Hon” is taught in Japanese textbooks. The numeral classifier “Hon” can count not only things that are long and thin, but also things that have a long and thin image, like cassette tapes. This cognitive element makes individual study difficult, emphasizing the need for numeral classifiers to be taught with a textbook in the classroom.

キーワード：助数詞，用法，数えられる事物，「本」，初級日本語教科書

1．はじめに

助数詞はひとつの学習項目として，ほとんどの日本語教科書で取り上げられているが，初級の早い段階で取り上げられることが多いため，指導されている用法や数えられる事物の選択が初級の既習語彙や既習文型の制限をかなり受けていると思われる。本稿では助数詞「本」を例に，初級日本語教科書と実際の使用で，その用法や数えられている事物がどのように異なるのか調査し，日本語教育での助数詞の扱いの問題点を示唆したい。

2．研究仮説

助数詞の用法というのは，分りやすく言い換えると，その助数詞がどのような事物を数えることができるか，数えられる事物をカテゴリーに分けたものであるが，日本語教育では助数詞を初級のかかなり早い段階で取り上げているため，助数詞によって数えられる事物に初級の簡単な語彙しか取り上げることができない。そのため，

助数詞「本」には「鉛筆」や「傘」といった簡単な具象名詞を数える用法以外にも，「課題」や「映画」，「電話」などのやや難易度の高い名詞も数える用法があるが，初級日本語教科書では扱われにくいのではないかと推測できる。しかしながら，実際の使用でもよく使われる用法であれば，日本語教育でも十分扱う意味があるのではないであろうか。

3．研究方法

中上級の総合日本語教科書で助数詞をひとつの課で取り立てて取り上げているような例は見られなかったため，初級日本語教科書を対象に教科書調査を行った。広く用いられている初級日本語教科書5冊を対象に，助数詞「本」がどのように取り上げられているのか，その用法と数えられる事物を中心に調査を行った。助数詞が取り立てて教えられている課だけでなく，本文中すべての助数詞を，[数詞＋助数詞]を含む文単位で抽出し，それぞれの用例を用法別に分類し，

分析を行った。

助数詞「本」の用法に関して、飯田（2004）では11の用法を挙げているが、そのうち日本語教育の初級段階で扱うべき用法を、北川（2004）で以下の4つに絞った。

細長いものを数える

相手との交信数を数える

始まりと終わりがあるひと続きの作品や
出し物を数える

達成するのに時間や努力を要する課題を
数える

抽出した用例を、用法別に分類し、それぞれの用法でどのような事物が数えられていたか、分析を行った。

実際の使用に関しては、日常における言語行動を調査するにはいくつかの方法が考えられるが、諸事情により今回はドラマの脚本を資料に用いた。脚本家連盟が毎年出版している『テレビドラマ代表作選集』（日本脚本家連盟）の1995年版から2003年版までのものの中から、テレビドラマの脚本を30本吟味、選出し、調査資料とした。教科書と同じく、助数詞「本」の用法とそれによって数えられた事物を中心に調査、分析を行った。

これらの両資料による調査結果を比較し、用法や数えられる事物にどのような異同が見られるか、考察した。

4．結果と考察

初級日本語教科書5冊を調査した結果、いずれの教科書でもかなり早い課で助数詞を取り立てて取り上げていた。また、助数詞「本」の用法に関しては、5冊ともに の用法しか取り上げられていなかった。 の用法で数えられるものには、単に外観が細長いものだけでなく、ものの中に細長いものが入っている「テープ」や「カセット」といったものも含まれるが、これらの

語を取り上げていたのは5冊中1冊のみであった。

一方ドラマの脚本では4つの用法すべてが見られ、 の用法では「電話」、 の用法では「シナリオ」が、 の用法では「講義」といった語などが数えられていた。

助数詞「本」の用法には単に視覚的に細長いものを数えるにとどまらず、認知的な側面があり、自主学习での応用的な習得は難しく、教室での指導が必要であると考えられる。 の用法のみならず、 の用法も取り上げ、数えられる事物も脚本での調査結果を参考にしながら、日本語教育の観点から教えるべき語彙を選択する必要が出てくるであろう。

5．まとめ

今回の調査で助数詞「本」には初級日本語教科書で取り上げられている用法以外にも、日常生活の中でよく用いられている用法がいくつかあることがわかった。例えば の用法で数えられる「電話」や、 の用法で数えられる「映画」や「ドラマ」、 の用法で数えられる「課題」や「レポート」といった語は、日本語学習者にとっても身近な語であり、日本語教育でも取り上げる意味が十分にあると思われる。

助数詞は「本」に限らず、初級では指導しにくい抽象度の高い語を数える用法を持っているものが少なくないが、助数詞を初級で指導するのであれば、このような用法を初級の後半や中上級でもう一度取り上げる必要があるであろう。もしくは助数詞の導入時期そのものの検討が必要になってくるであろう。

参考文献

飯田朝子 (2004) 『数え方の辞典』小学館

北川幸子 (2004) 「日本語教育における助数詞—ドラマの脚本の分析を通して—」修士論文（早稲田大学大学院日本語教育研究科、未公開）